

# 連珠っておもしろい

## 九段 河村典彦

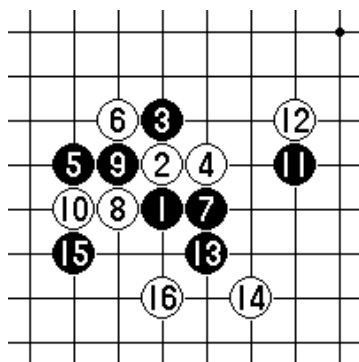
### ●第57回● やつぱりA級リーグ!

今年もまたA級リーグの時期がやってきた。今年の話題は何と言っても中村氏の復活で、昨年は思いもよらず予選で敗退しているので2年待ったようなものである。今年は一体どんな手を披露してくれるのかが楽しみだった。また、新たに福井、長副という若手が加わったのも面白い。近年にない興味深いA級と予想された。

さて、その中村氏の作戦だが、チーム戦で使った溪月八題を打つと思いきや、今回は1局も打たなかった。こういう所が中村氏らしい。この絞らせない駆け引きで、これを事前には研究しようがない。前半は様子見という感じを受けたが、中盤からエンジンがかかってきた。

注目した一局は飯尾戦。

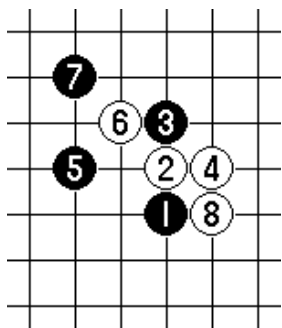
<黒：飯尾、白：中村>



寒星四題なら皆黒を取るだろう。黒5の手はチーム戦でも打たれていたが、曹冬がスシュコフに白勝ちしていたのが記憶に残っている。さて、その白6かど見ている。さて、何と白6!と打たれた。これには飯尾さんも予想外だっただろう。一見するとあまり強そうに見えるが、中村氏が打つとめちやめちや強防に見えてくるから不思議である。黒7は連を止めて当然だが、白8に黒9と入り、白10と押さえて黒の構想を問う展開になった。

黒11の開きに白12と止め、黒13、15と展開したが、白16でもう既につかまっているだろう。以下白60で白勝ちになった。この回戦は6回戦で、飯尾さんは1局目を勝ちながら4連敗していたので、勢いもなかった。さてもうからこういう展開にされては辛いだろう。

さて、これを見た最終日に中村戦を残している(それも飯後)長谷川、中山両名は、この対策に寝る間を惜しんで明け暮れただろう。例えば、冷静に見ると、黒7を反対に叩けば白8はここに打つしかなく、溪月峡月の見慣れた形に戻る。



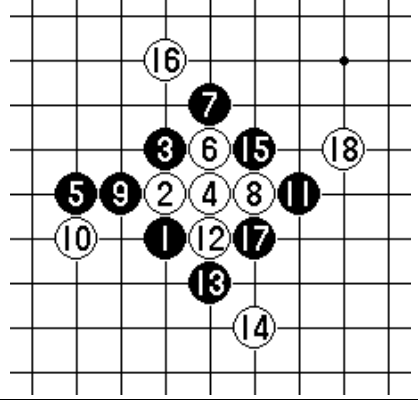
となると黒7はこう叩い

た方がいいかもしれないし、あるいは飯尾戦の展開でも何か違った展開を見つけていただろう。

しかしである。中村氏は今度は白6を変えてきた。長谷川氏は「これじゃあ研究した意味がないじゃない!」と心の中で叫んだかどうかはわからないが、そんな気持ちだっただろう。もっとも長谷川氏は中村氏と挑戦手合いの経験が多いので驚かなかつたかもしれない。いずれにしても、絞らせないということに関しては、中村氏の右に出る者はいないだろう。加えてあの読みがあるのだから鬼に金棒だ。

さて、その長谷川戦だが、チーム戦のスシュコフ―曹冬戦と同じように進んだが、白18まで進めてみると黒が勝つのはかなり難しくなっている。それにしても奇妙な形をしているが、黒の

<黒：長谷川、白：中村>

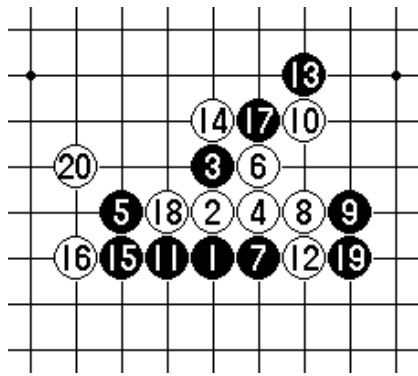


斜めの威力よりも、中にこもった白石のパワーの方が上回るらしい。この後、じわじわと黒を追い詰めていき、白54で天王山の一戦を制した。

これを見た中山君は部屋に戻って研究したに違いない。この黒7では勝てないと思っただろう、実戦では黒7を変化した。

ところが、これも中村氏の思うつぼだった。今度は白8から引き出して一気に追い勝ちを目指す。黒13はどうやら絶対止めよう、白14の時に黒15から四ノ

<黒：中山、白：中村>

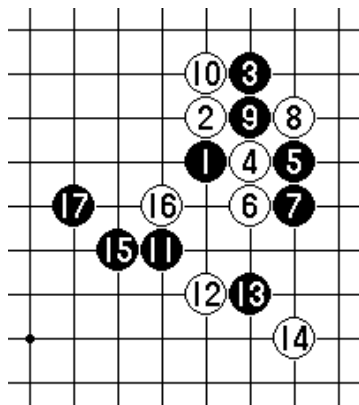


ビで止めるのが命綱である。おそらく中山君はここまで時間をたっぷり使って凌いだのだろう。しかし、それも中村氏の研究範囲で、白20までで白良しという研究があったとしたら、それはもう脱帽だ。そういう相手に勝てという方が無理である。連珠においていかに研究が重要であるかを如実にあらわしていると言ってもいいだろう。もちろん

この局も白40という手数で白が勝っている。中村氏はこれで優勝をほぼ手中にしたのだが、この3局が

優勝の原動力になったことは間違いなく。

ただ、これを挑戦手合いで使ったのが甘かった。おそらく大角名人はすべての局を調べていたに違いない。溪月からでも飯尾戦の局譜に戻る。もちろん中村氏は自信を持って臨んだと思うが、大角名人に手の内を明かしたのはやはりマイナスだった。



白6は7と引くのが普通だが、白6と打ち、寒星から打った飯尾戦に（盤端は違うが）戻った。大角名人も自信があったのだろう、堂々と受けて立った。

白10までなら混戦形で、いつの間にか黒が引き詰まるのがよくあるパターンなのだが、大角名人の放った黒11、13の構想が素晴らしかった。白の止めによって展開場所を変えるのが狙いだが、白12、14はやむを得ないだろう。そこで虎の子の連を惜しげもなく使ったのが、また素晴らしかった。よく見ると釘折れの形である。ここから浦月かよ！と言いたくなるが、必勝定石になるぐらいのいい形なのだ。盤端までの距離が問題になったが、何とか大角名人が勝ち切った。

この局もまた近年中村氏がよく外国選手に負けるパターンに似ている。白の作戦を黒がかいくぐるパターンだ。そうすると、大角名人が国際化を果たしたのか？いずれにしろ、この2人が切磋琢磨することが日本にとっても重要である。